

半夏の紅花

芭蕉が奥のほそ道の旅で、平泉から峠越えて難渋、そして雷雨、大雨に逢いながらみちのく尾花沢に着いたのが新暦の七月三日、「半夏（はんげ）」の「一つ咲き」の紅花の季節だった。さくらんぼで有名な山形県はかつて紅花の一大産地で、最上川から日本海を経て京都へ運ばれて高価な京ベニや紅花染めとして使われ、いまでは県の花として親しまれている。

芭蕉が訪れた弟子の清風は尾花沢の豪商で紅花問屋を営んであり、芭蕉は紅花の咲く季節、一日間もの長逗留だった。

紅花はアザミによく似たキク科の花で、この時期に濃い黄に朱色の粉を刷毛で書いたような、鮮やかな色の花を咲かせる。一面の紅花畑は黄色と緑の海に朱が散りばめられている風景となり、一株刈って見ると、原産地がエジプトだけあってドライフラワ―を思わせる固めの花、葉や茎だった。

七月三日は暦の上で半夏または半夏生ともいい、夏至から数えて一日にあたる日をこう呼ぶ。この頃、みちのくでは紅花が咲きだし、半夏の一つ咲き、一輪咲き」となり、土曜の入り前の花の盛りを前に摘みとってしまう。紅花は源氏

物語の末摘花として古来から知られており、美しさを残して刈り取られたその思いが、いつまでも残り、染めものとして深い花の美しさとなって現れ、いつでももの請っているのだといわれている。

今年は暖冬に続いて三月から五月の三か月気温が記録的な高温だった。サクラをはじめ花も実も半月から三週間も早い。六月中旬の谷川岳でも、すでにウスユキヨウが咲きチングルマも可憐な花が霧雨のなか揺れていた。友人の話では、梅雨の合間に七月はじめに見頃な南アルプスのキタダケソウを見に行く予定を立てたが、花が早すぎて取りやめたときいた。

零年だといまの時期、紅花は、半夏の「一つ咲き」のはずだが、今年の紅花は夏至の「一つ咲き」で、半夏の花の盛りでの末摘花」となってしまったのだろうか、それとも、6月の梅雨寒で少しは遅れたのではなからうかと思いをはせている。

（村松 照男）